Online　H-E-R-O

C.コード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｏｎｌｉｎｅ　Ｈ－Ｅ－Ｒ－Ｏ

【Ｎコード】
Ｎ３４２８Ｍ

【作者名】
Ｃ．コード

【あらすじ】
とあるオンラインゲームのプレイヤーから全てが始まった、この世のプレイヤーを幾人も巻き込んだＯｎｌｉｎｅで繋がった物語。
『全ては、（架空）世界の平和と秩序の為に！』
Ｏｎｌｉｎｅで紡がれたストーリーが今、始動する！！

※残りの部数が仕上がるまでは後の話数はおかしな状態ですので、更新までお待ちくださいませ！

Ｇａｍｅ　ｓｔａｒｔ！（前書き）

更新スタートしましたー！
ネット専用語句については、後書きの方に解説していきたいと思います。
抜けている部分がありましたら、遠慮なく突きつけてくださいッ！

Ｇａｍｅ　ｓｔａｒｔ！

俺の名前は『吉田（よしだ）　祥（しょう）』。
公立高校に通う１年生だ。夏休みも越えて９月の今、俺は猛烈に趣向を凝らす趣味がある。
それは『オンラインゲーム』というやつだ。
俗に言うＭａｓｓｉｖｅｌｙ　Ｍｕｌｔｉｐｌａｙｅｒ　Ｏｎｌｉｎｅ　Ｒｏｌｅ　Ｐｌａｙｉｎｇ　Ｇａｍｅ（略称ＭＭＯＲＰＧ）。
『多人数同時参加型オンラインＲＰＧ』というやつだ。
やり始めてまだ１カ月と言ったところだが、なかなかやりこんでいる方だとは思っている。
今もやっていて、熱中しているわけだが……。
お、チャットだ。画面ログへと見やる。

執行者Ｋ：誰かバルログ一緒に行こうぜ！
Ｂｏｏｓｔα：おお、ついにバルログに出陣か
堕ちた使者：俺も協力するよ～
執行者Ｋ：よっしゃー！　αさん、使者さんに感謝っす！
Ｂｏｏｓｔα：ドロップ品ｗｋｔｋ
堕ちた使者：バルログと言ったら『邪剣（ブラックロード）』ですね。
執行者Ｋ：んじゃソレ狙いで！　@３０分後にでも冥界の入口で落ちあいましょう
Ｂｏｏｓｔα：りょーかぃ
堕ちた使者：ＯＫ

今日も面白い。仲間と何かをするのは楽しいし、飽きない。
ちなみに言うと、バルログとはこのオンラインゲーム『Ｈ－Ｅ－Ｒ－Ｏ』界でのボス敵。
全てのボスをひっくるめてみると高いランクではないが、それでも

強くて名は広まっている。
邪剣と称されるブラックロードは剣としては名品で剣という分類で分けてみてもランクは高い。
雑魚敵をちまちま倒して偶然手に入れる武器とは格が違っており、雑魚敵から入手は不可能で、雑魚相手だとこの攻撃力のランクの武器を手に入れるには、
俺が今狩っている敵よりももう7，8ランクほど高くならないとならない。
故に、ブラックロードは誰もが憂いの目線を見せるほど。ゲーム内では所有者は
強者扱いの対象になっていて、強者の証でもある。

「くぅぅぅ、ついに俺もバルログか。」
友達にでもメールしておくか。学校には俺と同じオンラインゲームをやっているやつが3人ほどいる。
メール送信完了ッと。あいつらの憂いの目線が目に浮かぶな！

さてと、集合時間よりもずいぶんと早く冥界の入口に着いちまった。
すると、しばらくしてから冥界の入口にとあるプレイヤーが訪れた。
見た目は女か？　凄くやりこんでいそうなアバターもつけていて、なんだか強そうだ。
名前は……『ＧｉｒｌＨｅａｒｔｓ』か……。
ＧｉｒｌＨｅａｒｔ：堕ちた使者さん？
堕ちた使者：ん、はい？
ＧｉｒｌＨｅａｒｔ：やり込んでますね。このゲームは楽しいですか？

このプレイヤー、急に話しかけてくるとは。まぁ、色んな事も起きるし、それも面白味の一つと言う感じで、
俺はオンラインを今の今まで満喫いたわけだがな。こういう急な展

開ぐらい、割り切ってやるか。

堕ちた使者：そりゃまぁ楽しいです！

Ｇｉｒｌ」ｈｅａｒｔ：どれくらい楽しいですか？

堕ちた使者：このゲームの世界に入りたいくらい！

ＧｉｒｌＨｅａｒｔ：なら、招待してあげましょうか？

なんなんだこのプレイヤーは。おかしなことばかり打ち込んできて……

堕ちた使者：招待？

ＧｉｒｌＨｅａｒｔ：はい。すぐにこちらにこれますよ。

うっぜぇぇぇ！！　からかっているとしか思えん！　なら、やってもらおうじゃないか！

ん、待てよ？　もしかしてこれはもっと面白い……ボス戦のメンバー募集の暗喩（あんゆ）か？

そうか、そうなのか！？

堕ちた使者：なら是非招待してくださいｗ　ｗｋｔｋ

ＧｉｒｌＨｅａｒｔ：そのままでじっとしててくださいね

最後のＧｉｒｌＨｅａｒｔのログを見た直後、俺はめまいに襲われた。

「う、お……？」

視界が暗くなって……いく？

「う、うう……」
薄眼を開けると明るい。光が差し込んでいる。
が、そこは部屋ではなく、室内でもない。外だ。しかも緑が広がっている。
「……え、ここどこ！？」
思わず声に出す。
マジで、ここどこぉぉぉぉぉぉ！？
平和的な緑の草原の上に俺がいるってどういうことなのぉぉぉ！？
「ねぇ、そこの君。」
驚愕しているとなりで声を掛ける人がいた。
「ん、え？」
振り向くと顔つきの良い男性がいた。
「き、君は……。」
「『閃光ロイス』って言えばわかるかな？」
「せ、閃光ロイス……！！」
閃光ロイスといえば、Ｈ－Ｅ－Ｒ－Ｏ界では屈指の英雄プレイヤーじゃないか！！
「どうして英雄がここに！　確か今じゃＬｖ１０９で職業が『ドラゴンナイト』……。」
「良く知ってるね。」
「あなたのブログはまめにチェックしてましたから……。」
閃光ロイスはブログも経営していて、そこにこうして自分の成果等々を更新している。
このオンラインゲームでは有名人の代名詞とも言われているほど。
「そ、それで……ロイスが一体僕に何のようですか？」
「簡単な話さ。……一緒に旅をしないか。」
「え？」
最後の俺の一言を放った時の瞬間は脳裏に刻み込まれたよ。あえて言おう『どうしてこうなった』とな！！

Ｇａｍｅ　ｓｔａｒｔ！（後書き）

ドロップ：本来の意味は『落とす』だが、この場合は敵が落とすアイテムという意味。誰かから貰ったり、以来の報酬として入手した場合とは区別される。

ｗｋｔｋ：ワクワクテカテカ。要するに『期待しちゃうな～』という解釈の仕方で間違いは無いと思う。

@：『後』をタイプ省略した場合に用いられる。例：後１時間→@１時間

　もちろん時間以外にも個数等々に使ってもＯＫ.

Ｌｖ：レベル。実装初期ではＬｖ１００が上限だったが、大型アップデートの度にそれらの上限の枠が徐々に上がっていくという

のがこのゲームのオリジナル感溢れるシステム。ちなみに今現在はＬｖ１２０が限度。

職業：ゲームではよく使われる設定。選択により決定され、それにより他のプレイヤーとスキル等に大きな差が生まれる。

効果や恩恵は千差万別。

アイテムセット、スキャン

「簡単な話さ。……一緒に旅をしないか。」
「え？」
流石は閃光ロイス様。発する言葉も俺の想像とは違っていて当り前だった。

「あ、あの、ロイス様！　そのお言葉は誠でございますか！？」
「ア、アハハ、何も警護にならなくても大丈夫だよ……。」
「し、しかし！！　一端のプレイヤーが貴方様と同行など！！」
「それはこっちも同じ事さ。上限はＬｖ１２０なのに、僕なんてまだＬｖ１０９――――」
「もうＬｖ１０９なんですよ！？　それも職業も最高峰の『ドラゴンナイト』じゃないですかッ！！」
「そうだけど、『劣化Ｓｑｕａｌｌ』さんとか『キリンガ伯爵』さんにはかなわないよ。」
「え、あの、ロイス様。もしかして、その方々はお知り合いの方とか？　僕には理解できませぇん！」
「ハハ、ホント君は面白いね。勧誘して正解だったよ。で、ＯＫしてくれる？」
「さりげなく話題転換させないでくださいよ。誰ですか。その方々は！」
「えっとね。『劣化Ｓｑｕａｌｌ』さんが『ドラゴンセイバー』だったかなぁ。Ｌｖは確か……
この間会った時は１１３だったよ。伯爵も『トリックマスター』でＬｖ１１２まで上がっていたはず。」

……え？　な、なんなんだ。語られるのはどいつもこいつもＬｖ１００オーバーの超人ばかりじゃないか！！
や、やはり、良い事は無い！　ついて行けない！
も、もし同行してみろ……。ボス戦やら次元の違う狩り場やらに連行された揚句……
し、死にかねんぞ！　こ、このお誘いの許可は俺の死亡を意味しているのではなかろうか！
駄目だ駄目だ！　なんとか誘いを振り切らないと！
「ロイス殿。わ、私はこのお誘いを許容するわけには――――」
すると、後ろから徐（おもむろ）に声が発せられた。
「ちょっとーロイスぅ？　こんなところで何やってるのよ。」
「のわわっ」
「懐かしいね。『Ｔｒｕｅ姫』さん。現役そうで何よりだよ。」
「当ったり前よっ！　Ｌｖは６３とまだ低いけど……これでも『シーフ』として頑張ってるのよ？」
「うげげっ、Ｌｖ６３！　それもシーフの方でしたか！」
「ん？　ロイス。この方は？」
「ああ。この方は『堕ちた使者』さん。今、パーティー勧誘していたところなんだ。」
「ドンピシャってわけね……絶対やってるって思ってたわ。で、君、Ｌｖと職業は？」
「え、えーっと……」
は、恥ずかしくて言えない！　この流れだと、きっとそれ相応のステータスだと思い込んでいるはずだ。
こ、ここで流れを乱すわけには……。いきなり恥をさらすわけにはいかない！
俺は腰のアイテムポーチに手を突っ込んだ。
ゴソゴソと手が動く。た、確か街まで移動できるアイテムがあったはずだ。

『魔力の転送石』。こいつがあれば、大きな町に設置されている『転送拠点（テレポート　ベース）』に移動できるはずだ、
……あった！
「？」
「どうかしたかい？」
ヤバ、気づかれそうだ。だが、もう遅い！　俺の未来の為に！　すみません！　ロイス様！　姫様！
「『使用準備（アイテムセット）』！」
「ちょ、何する気よ！！」
「使者君！？」
動揺するロイス様と他一名。　ごめんなさい！　どうか御無礼をお許しくださいィィィィ！
「『完了（スキャン）』！　発動せよ！　『魔力の転送石』いいいッ！」
手に掴んだ石が眩（まばゆ）い閃光を放つ！

……は、はは。せ、成功したみたいだ！
やはり、プロとて使うアイテムまでは予想できまい！
恥はかかずに済んだが……またいつすれ違うかもわからん！　何しろあれは『最寄りの待ち』に
転移するだけだからな！　あのスタート地点からここまではそう遠くは無い。
ゲームと構図が一緒なら間違いなく数分と立たずにあいつらとすれ違うことは間違いないぞぉぉぉ！
「……逃げる準備しなきゃな。」
やっちまッたもんは仕方が無い。ここまできたなら、最後までやってやるさ！
俺がプレイしているのはＲＰＧのはずなのに、いつの間に逃走ゲームになっちまったっていうんだ……！？

アイテムセット、スキャン（後書き）

ドラゴンナイト：接近系では最高峰の位置に属する職業の一つ。
長身の武器を得意とするタイプで、長いリーチが最大の利点。
ドラゴンセイバー：接近系の職業で拳での攻撃を得意とする職業。
武器を使わないので素早い攻撃ができる。
拳タイプの職業は単発の威力は低いが、連続で攻撃することに最も長ける。
トリックマスター：奇妙なスキルでの攻撃が醍醐味の職業。
武器での攻撃ではワンパターンに極まる。が、スキル面では相手を陥れたり動きを規制したり、ステータスを抑制したりする罠系統が多い。
シーフ：盗賊。盗んだり翻弄したりと軽快な行動ができる。
攻撃面では短剣での素早い攻撃が特徴。欠点は体力の少なさ。

新人の集う街『カルウェム』

アイテムを使ってまでここに転移した俺は。ひとまず走った。
町はずれの民家の裏に周り、そこで休んだ。
「ま、まったく、おかしな現象ばっかりじゃないか……！」
走ったんだ。町を走っただけなんだ。どういうわけか、街中で普通に不可思議現象が炸裂していて！
それが町の人々にとっては日常茶飯事的な目線だった！
これってどう理論づければよい？
俺にも、使えるのか？　見たところ、アイテム自体は俺が最後のプレしていた頃の物が揃っている。
ただ、どういうわけか……装備がない。装備だけない。どうしょうううう！！
どこかで武器を購入しないと！　畜生！　せっかく『コア・ブレイド』を手に入れたばかりなのに……！
交渉してやっと手に入れた剣が……ぁぁぁぁッ！

「他の剣は……あった！」
が、あったのは武器防具、共に価値が低い物ばかり。
この世界には武器、防具、アイテム等、全ての物に『レア度』が指定されており、
今は1~13までのランクが存在。1のアイテムはこの世に腐るほど蔓延(はびこ)る有様だが、
ランク13のアイテムや武具というのは最高難易度の錬金術の成功品や、最強ランクのボスのドロップ品が
該当する。まぁ、今の俺には縁はありませんけどね……。
この武器のレア度は……2か。
「攻撃力は21……ハァ。」
攻撃力はこれにしては並々。平均数値。

コア・ブレイドなら攻撃力が８４もあったぞ。
おまけに属性攻撃強化のパッシブスキル『エレメントプラスＬｖ１』も
頑張って強化で上乗せしたってのに……このショックは大きい！

結果、俺の装備は全てがレア度２のものになった。
武器：ブロンズソード（攻撃力＋２１）
頭：漲りバンダナ（物理、魔法防御力＋８　スキル『ミドルリーチアタックＬｖ１』）
手：篭手（物理防御力＋１０）
鎧（上）：ワンダーシャツ（物理、魔法防御力＋１０　素早さ＋３）
鎧（下）：ワンダーパンツ（物理、魔法防御力＋１０　素早さ＋３）
靴：ダッシューズ（物理防御力＋５　素早さ＋５）
合計：攻撃力＋２１　物理防御力＋４３　魔法防御力＋２８　素早さ＋１１

うっはぁぁ……完璧にレア度２戦士だよこれ……。
漲りバンダナの『ミドルリーチアタックＬｖ１』が唯一の救いだ。
武器や防具についているスキルは大抵パッシブ（条件が揃うと常に効果がある）スキルで、
この『ミドルリーチアタック』は接近武器での通常攻撃、スキル攻撃（一部を除く）の威力を上昇させてくれるんだ。
スキルの最後に着く『Ｌｖ１』とかはそのスキルの強さ。スキル一つをとってもＬｖがあって、
そのＬｖが高いと恩恵も大きい。ただ、これの上限はひとケタ台とかなり低いけど。
ちなみに今の俺はＬｖ５８の『クルセイダー』だ。
うう、こんな貧相な装備のクルセイダーって他にいねぇよ……。
ちんたらしてても仕方が無い！　俺は脳内マップを頼りに、

町を出て次なる新天地へと向かった。
確か、次は『トルア村』だったな……まだ素通りできるレベルの場所だ。
そこを通過して、最終的には物資の流通が最も盛んな大都市『セントラルハイト』だ。
ここで武具を一通りそろえてようやく本腰を入れて行ける。
最も、今のままじゃとてもじゃないが……途中で御陀仏してしまうかもしれない。
お、道を歩いていると早速敵だ。名前は『ワイルドウルフ』か。
名前の割にとてつもなく弱い初級モンスターだ。ぶっちゃけ詐欺やろ？
えっと、攻撃スキルでも試すか。俺何使えたっけ……。
確か、『パワーブロウＬｖ３』に『ソニックウェーブＬｖ２』に『辻斬りＬｖ３』……
それから『スタミナチャージＬｖ３』と『ヒートフォースＬｖ２』とか『ジャストブロックＬｖ１』ｅｃｔ…
待て待て、冷静になれ！　他には『居合斬りＬｖ１』、『コンボラッシュＬｖ２』、『クールフォースＬｖ３』、『サンダーフォースＬｖ１』、『ミドルスラッシュＬｖ３』……後何があったっけ？
あ、そういえば『疾風迅雷Ｌｖ１』があったな。確か、直線状にいる敵に向かって即撃できるやつだな。
後凄い距離移動できるって聞いた事があるぞ。結構離れてても斬れるって攻略サイトに書いてあったな。
「行くぞ……疾風迅雷！」
スキル名を唱えた途端。体が軽くなったような感覚に見舞われる。
体が勝手に加速して、目の前の敵を薙いだ。
バシュッ　ワイルドウルフが宙に舞った。

「これ、すげぇぞ……。」
敵が宙に舞うのは確か物凄いオーバーキルをすると起こるエフェクト。
敵の最大ＨＰの３倍以上の威力で発動するやつで、華麗に決まると凄くかっこよく見える。
「行ける。これは確実に！　進める！　救われたァァァァ！」
道で歓喜に満ちる俺。アレ、ロイス様の事忘れてない？　まぁ、いいか。
そういうのは今後次第だろう。　今はロイス様から離脱して正解だったんだよ、きっと。
ウキウキな足取りで俺は脚を進めた。

木陰から二人が道で歓喜の声をあげている少年を見据えている。
「ねぇ、ロイス。なんでアレを勧誘したわけ？　スキルＬｖもパーフェクトじゃないし、
本体のＬｖも職業も並々じゃん！」
「フフ、きっと彼はムードメーカーになってくれると思うんだ。僕は結構そういう仲間がほしくてね。」
「ああいうリアクションが大きい人ってそう多くないもんね……。だけど、あれはどうなの？」
「不満かい？　姫君。」
「わ、私はそんなこと一言も言ってないでしょ！」
「だったら、意見なんてないよね？」
「そ、そうだけど……！」
「絶対に、彼は大物になるよ。行く末が楽しみだ。」
「……」
「おっと、彼が行ってしまう。行くよ、姫君。」

「あ、ちょっと、ロイスぅぅ！　待ってよぉ！」

二人のストーキングにもまったく気がつく事が無かった使者さんでした。

Ｓｃｅｎｅ．４《密集城下町『アリアドロス』ｐａｒｔ２》

この小説は現在稼働しておりません。
後日、新しい小説として本文を訂正します。
ご迷惑をおかけします。
後の話も全てこのような文章と同一にしますので極力閲覧は控えてください。
現在、別の小説を執筆中！
『Ｄｅａｔｈ　ｓｕｃｈ　ａｓ　ｉｎ　ｎｉｇｈｔｍａｒｅ』をどうぞ、よろしくお願いします！
新規の小説に血きましては活動報告の記事に記載させてただきますので、
もしよろしければ見てみてください。この小説の撤去も記事に書いてあります。
それでは、失礼いたします。話数個別の消去が出来ないため、このような処置になってしまいました。
本当に申し訳ございませんでした！！

Ｓｃｅｎｅ．６《密集城下町『アリアドロス』ｐａｒｔ３》

この小説は現在稼働しておりません。
後日、新しい小説として本文を訂正します。
ご迷惑をおかけします。
後の話も全てこのような文章と同一にしますので極力閲覧は控えてください。
現在、別の小説を執筆中！
『Ｄｅａｔｈ　ｓｕｃｈ　ａｓ　ｉｎ　ｎｉｇｈｔｍａｒｅ』をどうぞ、よろしくお願いします！
新規の小説に血きましては活動報告の記事に記載させてただきますので、
もしよろしければ見てみてください。この小説の撤去も記事に書いてあります。
それでは、失礼いたします。話数個別の消去が出来ないため、このような処置になってしまいました。
本当に申し訳ございませんでした！！

Ｓｃｅｎｅ．７《『次元錬成』の能力者》

この小説は現在稼働しておりません。
後日、新しい小説として本文を訂正します。
ご迷惑をおかけします。
後の話も全てこのような文章と同一にしますので極力閲覧は控えてください。
現在、別の小説を執筆中！
『Ｄｅａｔｈ　ｓｕｃｈ　ａｓ　ｉｎ　ｎｉｇｈｔｍａｒｅ』をどうぞ、よろしくお願いします！
新規の小説に血きましては活動報告の記事に記載させてただきますので、
もしよろしければ見てみてください。この小説の撤去も記事に書いてあります。
それでは、失礼いたします。話数個別の消去が出来ないため、このような処置になってしまいました。
本当に申し訳ございませんでした！！

Ｓｃｅｎｅ．８　《世界段位の確執》

この小説は現在稼働しておりません。
後日、新しい小説として本文を訂正します。
ご迷惑をおかけします。
後の話も全てこのような文章と同一にしますので極力閲覧は控えてください。
現在、別の小説を執筆中！
『Ｄｅａｔｈ　ｓｕｃｈ　ａｓ　ｉｎ　ｎｉｇｈｔｍａｒｅ』をどうぞ、よろしくお願いします！
新規の小説に血きましては活動報告の記事に記載させてただきますので、
もしよろしければ見てみてください。この小説の撤去も記事に書いてあります。
それでは、失礼いたします。話数個別の消去が出来ないため、このような処置になってしまいました。
本当に申し訳ございませんでした！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3428m/

Online　H-E-R-O

2010年10月21日08時59分発行